



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 18 November 2008 (afternoon)
Mardi 18 novembre 2008 (après-midi)
Martes 18 de noviembre de 2008 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と 1 (b) の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1 (a)

私の家は小さな山のなかに一軒だけ山を切りとつたぶりに建っている。つまり、一軒の家が山を背負った格好になっている。何処かから帰ってくる時は、遠くからその山が見えると、あの山の下に一軒だけぼつんとあるのが私の家なのだと思いととも、帰り道を歩いていく。歩行につれて山が迫つてき、道がすこし曲つていると山の角度がすこし変わり、そうして私は一步一步と山に近づいていく。

5 春には萌える草色にかすみ、夏には、猛々しく鬱陶しいほどに黒い緑がはびこり、秋には、くぬぎの多いその山は、紅葉というわけではなくて、全体が褐色になり、冬には灰色の枯木立となる、その時々の色合いを、私はよく知ってきた。

ところが、帰り道にどれほどの回発見たか教えようもないほどの、その山に、去年の十二月のその日、私は全然別な光景を見たのであった。

10 十二月だから山が褐色になっている時だった。話が前後するが、私はその発見後、くぬぎという木がどういう種類の褐色になるかを注意して見た。大体、それがくぬぎだということも知らなかったのであるが、その発見後、道から飛びあがって、傾いた枝から葉を一枚もぎとり、樹木図鑑で調べて、くぬぎと知った次第である。その褐色を注意して見ると、いわゆる紅葉や黄葉のうつくしきは全くなくて、ばしばしと愛想わるく乾いているだけなのである。潤いも艶もない、灰色がかった褐色なのだ。そうした褐色が山全体をおおっている眺めというものは、とりたてて眼を驚かせる類のものではない。ああ冬がくるな、と、その眺めから感じる程度のものである。

15 さて、十二月のその日、私は夕方に買物から帰ってきた。夕方に買物から帰ってくるというのは、私の習慣ではなかった。人が夕食のために自分の家の内部に入ってきてしまうために私の家のまわりでふいに人の気配が途絶えてしまふ夕方という時間は、小説を書くにはじつに貴重で、いつも私が書齋にいる時間であつたのだ。ところが最近、私の家の近くの瑞泉寺へ行く人が急増して、昼間に私が外を歩くと、そういう人に出会うので、十二月のその日、何となく私は買物の時間を夕方に変更する気になつたのである。それが幸いした。

20 褐色のくぬぎにおおわれた山は、その日のその時、山そのものの内奥から光が洩れでているような色合いになっていた。褐色は単なる褐色ではなくなり、朱色の赫やきをおびていた。光といい色といい、くぬぎの枯葉の持っている山を、内部から照らし染めているふうなのであった。

勿論私は、それが夕陽のせいだということは知っている。

25 一步一步と、いつものように山のほうへ帰っていくのだが、色合いの微妙な明暗をも見落とすまいと、眼を大きく見ひらいて帰っていった。その期待に応えるだけのものを、山は私の一步一步に与えてくれた。そして極まつていく視覚の歓びの総仕上げとして、私の家の前に立つた時、家の背後の山が顧わしているものを、私は見たというわけだ。それは、生きている超現実主義の絵とでもいえるのか、自然でありながら完全な人工のものに化しているのである。何十本もの巨大なくぬぎが、褐色と朱色と金色の混じりあつた色合いの、茫漠と興行のある立体をなし、水色の空のなかへ昇つていくふうにとそり立っていた。この瞬間の神秘のために、一切がぴたりと息を殺して何かをうかがっているような、そんな無言がいきわたっていた。毎日毎日見てきた自分の家の背後に、これがあつたのを、何と私

は十年余りもの間ずっと知らずにいたのかと、驚きに打たれて、たまたま通りかかった人が私を訝るふうに見るまで、自分の家の前に突っ立っていたのであった。

35

四時半から五時までの間のことらしかった。翌日、私は同じ時刻に買物に出かけて帰ってきた。勿論それに出会うためである。何処かへ出かけて帰ってくるという構えが、どうしても必要なのであった。

ところが、私はそれに出会うことができなかつた。たしかに山のくぬぎの褐色は夕陽で色づいてはいたが、前日のあの超現実の気配がないのである。私は、またその翌日も、それに出会うために、同じ時刻に買物に出かけて帰ってきた。だが、それはなかつた。

40

私は条件を仔細に検討してみた。まず、四時半から五時までという時間帯のなかで、そのなかでもやはり選ばれた一瞬というか何分間かがあるらしい、ということである。それよりすこしでも早かつたり遅かつたりすれば、駄目なのだろう。第二に、夕陽の具合によるらしいということ私を考えた。晴天でなければならぬことはいうまでもないが、湿り気も関係があるだろう。どの程度晴天であるか、湿り気の多いか少ないかが、夕陽の照射を条件づけるのだろう。

45

夕陽が私の家より西のほうにある山のむこうに見えなくなつて、暫くすると、いわゆる夕焼が始まる。西空の下方が赤く染まり、その赤さが放射状になつて中天のほうへ拡大していき、空の半分が深い深い赤に照り映える、わずかに十分ほどの時間が、いろいろな条件のそろつた日に認められる。その時が、あの光景に出会える選ばれた時であるらしい、と私は気がついた。だがそれ以後、私は一度もそれに出会うことがないままに、くぬぎの落葉が始まつてしまつた。さて今年は、十二月中旬にそれに出会えるかどうか、私は今から、その時にむけて構える気持ちでいる。

高橋たか子、(黄昏の驚異、『どこか或る家』 一九七五年)

(注) くぬぎ ブナ科の落葉高木。高さ約一〇メートルの樹木。

瑞泉寺 鎌倉にある禅寺。花の寺として知られる。

1 (b)

しずかな秋

何千万何億のお母さんがあらわれてはきえる。この地球の間に
何千万何億の父親が出てきては消える。この太陽の照っている荒地をよぎって。
でたらめのできないかなしみに
きちがいになれない不幸に
5 人間どもが苦しんでいる
青い虚空に浮いている地球の上で
一步三百哩で突っ走っている銀河系の中で
どこへゆきつくかわからない虚無の未来へ
泣き、笑い、くるしみ、戦争、悪徳、
10 微小なくせに
時間と空間を体いつばいふくらましている人間どもが
深い孤独の果てでしか手を握りあえない人間どもが
光の中でいがみあい、
花たちに対して内に恥辱をかんじ
15 花が何も抗弁しないから知らんぷりをして
図々しくも神みたいな顔をして威張っているやつらが
何ともならない虚無の大未来にいそいでいる
コスモスの咲いている垣根をめぐって
偶然の中にもぐりこみ
20 そこで地上にはない秩序の道をさがし
見知らぬ小路のまがり角などで ふと
一瞬が永遠である景色を
呆然としてながめている
まったく意味のない大きすぎる意味を
25 自分でない自分の自分を
なにもないくせ物質で満たされている空間を
その赤実のおそろしい唸りを
宇宙がただ一本の花になった夢を

30

うつかり見てしまった男はもう、
この世では使いものにならなくなってしまったのだ

青のきらきらする大空の下で、
子どもたちの運動会が快適に行われている
しずかな秋だ。

蔵原 伸一郎 (「しずかな秋」、『詩学』一九五三年五月号)